

■今年の国語は！？

はっきりと書かれていないからこそおもしろい。

■出題形式

大問は2問で、構成や出題形式に大きな変化はない。物語文の読解と独立した漢字の大問という構成。今年度（'20年度）の受験者平均点は66.8点で昨年度（'19年度）より1.0点ダウンした。

□の長文読解に関する設問は、記号選択式の問題が7問、指定字数のない記述式問題が5問（「簡潔に説明しなさい」解答欄1行が2問、「説明しなさい」解答欄3行、4行、5行各1問で合計3問）計12問（解答箇所は14個で昨年度と同じ）。なお、過年度と同じく、漢字のみが独立した形で□として出題された。近年、この出題形式が続いている。ただし、漢字の出題形式は変わり、これまで1文中に1問であったが、4文中に10問という形式であった。かなり以前の後期日程では見られた形であったが、前期日程ではめずらしい。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	60分	60分	60分
大問数	2題	2題	2題
小問数	15問	13問	13問
配点	120点	120点	120点
最高点	99点	94点	101点
受験者平均点	74.3点	67.8点	66.8点
合格者平均点	非公表	非公表	非公表

※ 3科受験は3科合計340点を44/43倍して換算。

■出題内容

- 物語文 『トロッコ』 芥川龍之介
- 漢字の書き取り

□ 明治生まれの作家の作品からの出題が続いてきた洛星中学校の前期日程だが、昨年度は昭和四年生まれの竹西寛子氏の短編から出題された。今年度は再び明治生まれの作家、'13年度前期日程『雛』の作者でもある芥川龍之介の作品。

『トロッコ』といえば、「心情と情景描写」ということが考えられるが、今年度の入試問題では人物関係や主人公の状況を正確に読み取ることに重点が置かれている。芥川龍之介の作品は短編が多いが、非常に奥の深い作品が多い。この『トロッコ』においても、トロッコで大変な目に遭った少年の話で終わらせるのではなく、最後の4文で、妻子をもった26歳の良平が「その時の彼」と同じ不安や心細さに襲われているところで終わる。また、それを問うところは洛星であれば、当然であろうし、非常によく考えられた出題である。読解型の記述式問題は、そのほとんどが主人公の心情読解に関わるものである。「粘り強く本文に材料を求める姿勢」と「自身の言葉を適切につなぎとして用いながら答案を紡ぐ柔軟さ」とともに求められる。その他の記述問題も含め、中学入試の問題としての難度は極めて高く、類題での演習が不可欠である。

また、今年度の新傾向問題としては、軽便鉄道の経路（略図）を示し、「良平」が乗ったトロッコの経路と重なる部分を含むものを選ばせる問題があった。受験生は虚を突かれたかもしれないが、主人公が見る景色と地名とを考え合わせれば正解にたどりつけたはずである。

□ 昨年度までの1文1問ではなく、1文10問と出題形式は変わったが、文脈からその語句の意味を特定する必要があるという点では昨年度までと同様である。実際、基本的な同音異義語・同訓異字の出題が多く、難解なものはない。

■合格に向けての対策

'18年度の『屋根の上のサワン』も今年度の『トロッコ』も、非常に有名な作品です。しかし、問われる内容は受験生とはいえ6年生には難しいところもあります。繰り返すにはなりますが、問11で「現在の良平の生活」を訊ねるのは、「その時の彼に触れ」という指示はあるものの難度の高い問題です。このように洛星の国語については他校とはちがった意識を持って対策を練る必要があります。また、明治、大正、昭和初期の作家の文章からの出題が多いことも、学校からの明確なメッセージです。外国語や外国の文化を学ぶと同様、自らの持つ価値観や普段使う言葉とは異なる地点から書かれた文章をじっくりと読み解くことは、すべての専門的研究の基本となる姿勢です。日々の読書の中で語彙力をつけ、粘り強く文章と向き合い、考え抜くことを楽しめる「器」を作ってもらいたいところです。一通り過去問を解くことはもちろんですが、洛星の場合は同じ問題であっても、時を空けて繰り返し解き直してみることも実力アップにつながる対策と言えます。

■今年の算数は！？

受験者平均点が65%となり、簡単にミスが許されない高得点勝負に！

■出題形式

試験時間は60分。'10年度からは3科目入試の導入を機に、国語と算数が各120点満点となった。

昨年度（'19年度）と比較し、大問数に変化はなく、小問数は増加している。今年度（'20年度）は、昨年度とは変わり、**5**、**6**のみが大問という形式であった。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	60分	60分	60分
大問数	6問	6問	6問
小問数	19問	17問	21問
配点	120点	120点	120点
最高点	115点	120点	120点
受験者平均点	80.3点	74.4点	78.3点
合格者平均点	非公表	非公表	非公表

※ 3科受験は3科合計340点を44/43倍して換算。

■出題内容

- 1** (1)四則計算 (2)四則計算 (3)キセル算
- 2** (1)比と割合の文章題 (2)倍数変化算 (3)時計算
- 3** (1)角度 (2)比と平面図形 (3)平面図形
- 4** (1)立体図形（体積） (2)立体図形（切断） (3)立体図形（切断）
- 5** 旅人算
- 6** 規則性

**1** (1)～(3)は平易な計算問題。(3)はキセル算であるが洛星志望者であれば気付くはずの問題。全問必須正解問題。 **2** (1)～(2)は平易な問題で2問とも必須正解問題。(3)に関しては時計算の左右対称の問題。どこかで一度は解いたことがあるはずの問題。是非正解しておきたい。 **3** (1)は角度を求める問題。長方形を2回折り返したときにできる角を求める。特段の閃きは不要。必須正解問題。(2)は基本的な比と平面図形の問題。必須正解問題。(3)は3枚の正方形を重ねて、2枚の正方形が重なっている部分の面積を求める平面図形の問題。過去に洛星で出題されている。確実に正解したいところ。 **4** (1)は立体図形の問題。展開図から見取り図をおこせば簡単に解ける。必須正解問題。(2)は立体の切断の問題。基本的な知識があれば解ける問題である。確実に得点したい。(3)も立体の切断の基本的な問題。(2)、(3)を正解できた受験生は合格に近づけたであろう。 **5** 旅人算の問題。ここ数年の速さに関する問題と同様に比を駆使して解く問題であったが、難易度は高くなく、全問確実に合わせたいレベルである。過去の洛星中学校の旅人算で訓練していれば簡単と感じるのではないかと思われる。全問正解できるレベルの問題なので、ここで全問正解した受験生は一気に合格に近づけたのではないだろうか。 **6** 規則性に関する問題。2020番目を問われていることから、周期性の問題になるということに気付けば完全解答も難しくない。(1)、(2)までが必須正解問題、(3)は差がつく問題。

洛星中学校はこの3年、洛星中学校に向けて対策、準備してきた受験生にとっては比較的取り組みやすい難易度、問題内容であった。上記の通り、捨て問がなく全く手がでないような問題もなくなってきている。そのため平均点が上昇し、いかに取りこぼしがないかが勝負の分かれ目となった感がある。日々の学習の中でいかにミスなく答えを合わせるかという部分を意識して準備しておく必要がある。

■合格に向けての対策

平面図形は、「面積比」や「相似比」を使って解くものが多く（'10年度以降、昨年度を除いて毎年出題）、大問で出題されることも多々ありますが、比較的難易度は低いので、全問正解をめざしてください。速さは、旅人算を中心に出題されますが、以前と比べて問題文も短くなり、条件を把握しやすくなってきています。ダイヤグラム・状況図をかき、丁寧に解く練習を積んでください。特に、時間が同じであれば、「距離の比＝速さの比」、距離が同じであれば「時間の比と速さの比が逆比」、速さが同じであれば「距離の比＝時間の比」は徹底して身に付けておきましょう。

数（整数の性質、規則性、場合の数）の問題では、'11年度**3**、'12年度**5**、'13年度**1**(2)、'15年度**4**、'16年度**1**(3)、**6**、'17年度**1**(3)・**6**、'18年度**4**・**5**、昨年度**6**、**3**(2)、今年度**6**のように、「書き出し」を必要とする問題もよく出題されます。普段の学習から、実際に手を動かす意識を持っておいてください。

最後の大問は'13年度、'17年度、'18年度、今年度を除いて、完答するのは困難なので、過去問演習を通して、「どこまで解くのか？（どこであきらめるのか）」を見極める訓練を積んでおきましょう。

また、図形の移動（平面、立体問わず）がここ数年復活傾向にあります。問題文を熟読し、平面上の移動なのか、立体上の移動なのかの判断を正確にし、作図も十分に練習しておくことが必要です。

■今年の理科は！？

昨年度（'19年度）からやや易化したが、平年と比較すると難度は高め。

■出題形式

過去3年間、大問数は4問で安定しており、物化生地が概ねバランスよく出題されている。小問数にはやや変化が見られ、計算問題の割合が多い年はその数が減る傾向が見られる。全体に占める計算問題の割合は、'15年度21%、'16年度54%、'17年度27%、'18年度25%、昨年度（'19年度）51%と推移しているが、今年度（'20年度）は61%で、過去6年間で最も高いものとなった。ただし計算自体はそれほど難度の高いものではなく、四捨五入をとまなう割り切れない小数の計算が非常に多かった昨年度と比べて、受験者平均点は昨年度の60.5点からやや上がり64.3点となっている。2年連続で受験者平均点が65点を下回る形となったが、今年度は「前半の小問を間違えると、芋づる式に後半の小問でも失点する恐れのある問題」が多数ふくまれており、1限目に実施される教科であることを考えても、例年同様「勝敗を分ける差がつく科目試験」であったと言える。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	50分	50分	50分
大問数	4問	4問	4問
小問数	56問	51問	51問
配点	100点	100点	100点
最高点	92点	92点	98点
受験者平均点	66.7点	60.5点	64.3点
合格者平均点	非公表	非公表	非公表

※ 3科受験は3科合計340点を44/43倍して換算。

■出題内容

- ① 【地学】地震の計算と緊急地震速報      ② 【物理】ばねの計算、円盤のてこ、積み木のてこ  
 ③ 【生物】種子の発芽とジベレリンの作用      ④ 【化学】ネルンストの分配律

① ある地震について、3地点A～CのP波到達時刻と初期微動継続時間が示された表をもとに、表中の空欄に入る時刻や時間、震源距離などを問う問題。本校においては'08年度③、'11年度⑤、で同様の地震に関する計算問題が出題されているが、今年度の問題はこのどちらの問題よりも難度は高い。とはいえ、受験生にとっては何度も見たことがあるパターンであり、計算も極めて簡単であるため、全問正解が要求される得点源となる問題であった。ただし、先述の通り1つを間違えると芋づる式に他の問題も間違えてしまう可能性がある大問であり、そういう意味での危険性はあったとも言える。

② 問1～問4までは2～3本のばねを並列につないで、おもりをつるした棒を支えたときのばねの長さやおもりの重さ、おもりの位置などを問う問題、問5はおもりをつるした円盤の回転角度を問う問題、問6～問7はいわゆる「レンガ積み」の問題。問1～問4までは'06年度①を巻き直した形の問題だが、'06年度の問題ではすべて同じ長さであったばねの自然長が今年度の問題では異なっているため、難度は少し上がっている。さらに問5は、'08年度①の問5と'06年度①の問7の図を掛け合わせたような問題である。問6と問7は洛南や他の学校でもよく出題が見られる定番の問題で難度は高くない。特に問1～問5までは過去問を強く意識した問題構成となっており、過去20年分の問題を解いていた受験生にとってはかなり大きな安心感を与えたのではないだろうか。

③ 種子の発芽についての実験に関する文章を読んで、胚が出すジベレリンの作用について問う問題。問1～問8まであるうち、ジベレリンに関するものは半数で、残りの半数はヨウ素デンプン反応やヒトの消化に関する基礎知識を問うものである。植物のホルモンであるジベレリンの作用を問う問題は大学入試で定番のネタとなっているが、中学入試においても最難関校を中心に問題がごくまれに見られる。本校ではこのような大学入試あるいは高校入試で出題される生物の問題の出題がよく見られ、過去には「オーキシンの作用」「酸素解離曲線」「クリアランス」「血液の循環と心室の圧容積ループ」に関する問題が出題されている。

④ ネルンストの分配律（互いに混ざることがない2種類の溶媒の間に、どちらにも溶ける物質が分配されるときにはその物質の濃度比が一定となる法則）の問題。③と同様に大学入試で見られるものだが、中学入試でもごくまれに見られ、例えば昨年度の帝塚山中学校で出題が見られた他、今年度の甲陽学院中学校でも本校の問題をさらに高難度にしたものの出題が見られた。計算自体は決して難しいものではないが、問題文に2行で示されているネルンストの分配律の意味をしっかりと把握しなければ、問3と問4の大部分を失点する恐れのある問題であった。

■合格に向けての対策

本年度の問題に顕著に表れている通り過去問の踏襲が見られる学校なので、過去問20年分はもちろん、洛南高等学校附属、大阪星光学院、高槻などの過去問などに積極的に取り組んでください。ただし、ここ数年の本校の理科の問題に挑む上で何よりも重要なことは、「基本的で簡単な問題を絶対に失点しないこと」です。つまり、宿題テキスト★1個～2個のようなレベルの問題を決して落とさない鉄壁の守備力を身に付けることが最も重要であり、それだけ基本レベルの問題の出題量が多いということです。もちろん、簡単な問題を正答するだけで合格できるほど甘い学校ではないので、鉄壁の守備力の重要性は取捨でいうところでは、述べておきます。

■今年の社会は！？

参議院議員選挙、歴代の天皇と将軍、長期政権総理の三本立て

■出題形式

記述式問題が昨年度（'19年度）より1問減の5問となり、例年5、6問の出題で定着している。内容的には広い知識での考察力を必要とする出題もあったが、全体的に難易度の高い問題は見られなかった。昨年度同様、世相に合わせたテーマの問題が多く、標準的なレベルで終始していた。大問は1問増加していて、小問数は4問増となったが、熟考を要する問題はほとんどなく50分の試験時間で十分解答できる問題量であった。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	50分	50分	50分
大問数	3問	4問	5問
小問数	77問	66問	70問
配点	100	100	100
最高点	96	95	100
受験者平均点	80.3	65.4	78.8
合格者平均点	非公表	非公表	非公表

※ 3科受験は3科合計340点を44/43倍して換算。

■出題内容

- 1 2019年の参議院議員選挙に関する歴史・時事問題
- 2 主要歴代天皇と幕府の征夷大將軍をテーマにした歴史問題
- 3 歴代長期政権の内閣総理大臣一覧からの歴史問題
- 4 気候・産業・人口移動・地形図の問題
- 5 国際連合に関する公民問題

- 1 参議院議員選挙が行われたことによって、日本の選挙制度に関して過去と現状を比較しながらの出題や日本国憲法の条文空欄穴埋めと幅広い問題が見られた。障害をもつ新人議員が登院することに関連して、パラリンピックを解答させる出題もあった。自民・公明・日本維新3党の参議院での議席が3分の2に届かなかったために、困難になったことを答える問題は、日頃からニュースに関心を持っておかなければならないことを痛感させられた。
- 2 新天皇の即位に関連したと思われる出題で、昨年度の年号に関する問題に引き続き世相を踏まえた問題であった。天皇だけではなく、歴史上の3つの幕府で政権を執った征夷大將軍まで手広く出題された。ただし、ほとんど平易な内容の問題の連続で、受験生としては完璧な解答が要求される。
- 3 安倍晋三首相が長期政権で最上位となったことに関して、在任日数12位までの首相一覧からの問題であった。歴史の学習で登場してくる首相のラインナップで、出題内容も重要事項を問う問題となり、受験勉強での知識が大いに発揮できたと想像できる。
- 4 端的には地理問題とまとめられるが多彩な知識を必要とする大問であった。オーストラリア・サウジアラビア・日本・ロシアの首都の気温と降水量が示され、オーストラリアと日本の首都を表すもの選ぶ問題は、オーストラリアが南半球にあることに気づけば問題なく正答が導きだせる。地形図の問題は、地図記号・縮尺・等高線の読み取りと定番の内容が盛り込まれていた。他に農業・工業の問題も基本的であったが、秋田県・大阪府・神奈川県の日間人口と夜間人口からそれぞれの府県を答える出題は府県の人口と特性を考慮する、知識と思考力の必要な洛星らしい問題であった。
- 5 国際連合に関する問題で、国際連合の6つの公用語のうち、ロシア語を解答するのは若干迷った受験生がいたかと思われる。

■合格に向けての対策

洛星中学を受験する場合、過去問は同レベルの中学の比較的新しい、2～3年分の問題を幅広くこなしておくことが効果的であると考えられます。時事問題については、短刀直入に問うものもあれば、世相の動きを背景にして、関連事項を問題の随所に巧みにちりばめて問う問題もあり、来年度も留意しておいてください。また、新聞・テレビの最近のニュースにも気を配っておくことは言うまでもありませんが、5年前くらいまでの主要ニュースも確認しておいてください。対策としては、当然『古今東西』『地図帳』『歴史資料』『公民資料』『自由自在』の内容は確実に学習しなければなりません。時事問題への対応も必要で、最近の社会用語・現代用語にも十分注意しておいてください。漢字で答えることを原則としているので、その学習についても怠りなくしておきたいし、図表・グラフ読み取りの出題に対応できるようにしておくことも必要です。